

このとき、直接対決が引き分けあるいは、該当するチームが3チーム以上あり、直接対決によって決められない場合は、各試合の相手チームの内野人数を集計し、その合計の少ないチームを上位とします。さらに、相手内野人数の合計が同じだった場合は、再試合を行い勝った方を上位とします。ただし今大会では、1位と2位が決まらない場合のみ再試合とし、それ以外は同位とします。

(へ) 外野

前、後半の最初の外野選手(元外野)は**1名以上7名以下**でチームから自由に選べます。

内野の選手はアウトになった場合に外野へ移動します。外野の選手は、自分の攻撃で相手内野選手をアウトにした時に内野へ移動します。内野移動を放棄することも出来ます。

元外野も相手の内野の選手をアウトにしなければ自分の内野に戻れません。

作戦としては、通常、元外野は1名。2名で始めるチームもあります。それは外野へのパス、外野からのアタックに自信のあるチームの作戦です。元外野だからといって途中やゲーム終了時に内野に戻ることは出来ないなので、内野の人数が減っている分、勝敗上不利と言えます。

試合の流れについて

選手はゼッケンを着け、審判の号令でコートに全員整列します。一礼した後、内野、外野、ベンチへと別れます。**別れる前に自コートの中央で円陣を組んでも良い**。別れた後は、内外野とも座り、審判の人数確認を待ちます。人数確認後、審判の「ジャンプボール」のコールで立ち上がり、ジャンパーはコート中央へ進みます。

(1) ジャンプボール

試合はジャンプボールで始めます。

内野選手の中から一人をジャンパーとして選び、コート中央で相手コート側に入ります。

主審が投げ上げたボールが落ち始めてからタップ(手ではじく)します。ジャンパーは、タップしたボールをもう一度はじいたり取ったりすることはできません。

タップされたボールが、内野選手が拾えずに内外野の外へ出た場合は、最後にふれた選手(ジャンパーも含めて)の相手側の内野ボールで開始します。誰にも触れずに外へ出た場合はやり直しとなります。

ジャンプボールの後、内野からの第1投でジャンパーにアタックはできません。たとえ当たらなくてもジャンパーへのアタックの投球であればファールになります。

(2) アタックとパス

内野と外野の間でパスができます。内野同士、外野同士はプレー中にボールを渡すことはできません。

パスは連続4回まで、5投目はアタックをしなければいけません。

『アタックとは』 相手選手が自然体で立っているとして肩の高さより下、両手を広げた幅の間をノーバウンドで通る投球をアタックといいます。アタック以外の投球はパスとなります。

(3) アウトとセーフ

内野選手が、相手のノーバウンドの投球を取れなかったり、当てられた場合にアウトになります。

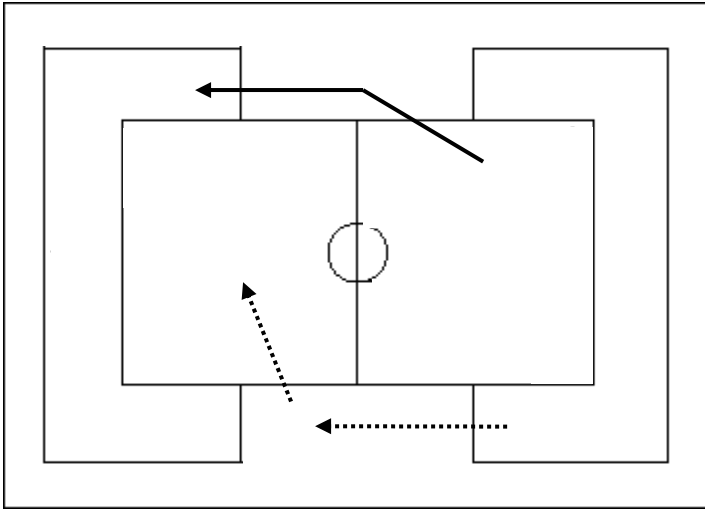
一回の投球で2名以上当たった場合は、最初の1名だけがアウトになります。

選手に当たったボールがコートに落ちる前に、味方選手がキャッチした場合は、アシストキャッチが成立し、当たった選手はセーフとなります。但し、味方選手にファールがあればアシストキャッチは認められません。

またアタックした時に、攻撃側にファールがあった場合は、相手選手に当ててもアウトにはなりません。

顔や頭にボールが直接当たった場合はセーフとなります。(ヘッドアタックのファール)

(4)内外野への移動



試合中の内外野への移動はコートの外を通ります。相手の内外野のコートに足を踏み入れてはいけません。また、試合中の内外野への移動は審判の後ろを通ることが原則です。

アウトになった内野選手が外野へ移動するときは左図の実線 → のように動き、主審や副審の後ろを通り、相手の内外野に入らないようにします。

アウトを取った外野選手が内野へ移動する場合は、点線 …… のように動き、主審や副審の後ろを通って、相手の内外野に入らないようにして

内野復帰します。その場合、アウトのコールがされたら速やかに外野を出ます。内野に復帰する場合、相手が攻撃中の場合には、内野の手前で待機して、攻撃の中断した時点で復帰することが認められています。

(5)内野移動の放棄

外野の選手が相手の選手をアウトにしても、次の場合は自分の内野に帰れません。

- 1) 外野選手が一人の場合。但し、相手内野選手の最後の一人を外野からアウトにして試合終了となった場合は内野へ移動できます。
- 2) アウトを取ってから、外野の中でボールに触れたとき。故意でなく、体の一部がボールに当たってしまった場合も含まれます。
- 3) アウトを取ってから、すぐに内野に帰らなかったとき。

(6)ボールデッドと試合再開時のボールの支配権

試合中、コート(内外野)の外にボールが出て、床や壁についた時、ボールデッドとなります。

ボールデッドになった時のボールの支配権は、最後に触れた選手の相手チームの内野ボールとなります。

例1・選手が投げたボールが誰にも当たらず、また触られることなくコート外へ出た場合。最後に触れたのは投げた選手なので、投げた選手の相手側の内野から試合再開。

例2・選手が投げたボールが、相手の選手に当たり、そのままコート外へ出て行った場合。最後に触れたのは相手選手なので、投げた選手の内野から試合再開。

ただし例外として、ワンタッチルールに基づいて特定の外野選手のボールとなる場合があります。

ワンタッチルール ボールをキャッチしようとした外野の選手が、掌(てのひら)でボールをさわって、そのままボールが外に出てボールデッドになった場合は、その選手のボールとします。

ただし掌でボールをさわった後に、ボールが体の他の部分に当たった場合は、認められません。

また、ボールデッドとなるまでに、つまりボールが空中にある間に、ラインを踏んだり、踏み越した場合にはオーバーラインキャッチとなるので、ワンタッチは認められません。

(7) プレーの再開はボールアップ

ボールデッドやファールの後にプレーを再開する時、ボールを持った選手は、立ち止まってボールを頭の上に挙げ、主審のホイッスルの後にプレーを再開します。

ふたば、あおばの部では、ボールアップを主審が注意して促します。主審の注意を聞かずボールアップをしなかった場合にファウルとして相手ボールとします。

(8) 試合の終了

規定の時間が終了した時点で、試合終了となります。試合終了のホイッスルが鳴ったとき、その直前に投げられたボールまでが有効であり、そのボールに当たった場合のアウトは認められます。ホイッスルが鳴り始めてから投げられたボールは無効です。

試合が終了すれば、内野・外野の選手はその場で座ります。特に主審、副審がそれぞれの人数を確認するので、みだり動かずに待ちましょう。

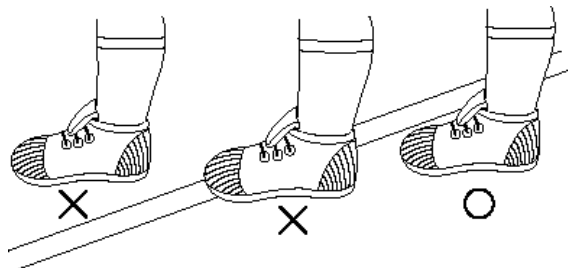
規定の時間内であっても、内野の選手が全てアウトになったときはその時点で試合終了となります。最後のアウトを取った外野選手は内野復帰します。この場合は外野人数がゼロになる場合もあります。

前半が終了したら、必ず選手を前半に出場しなかった選手と交代させて、後半を開始します。後半も前半同様、審判による人数確認の後、ジャンプボールで開始します。

(ト) ファールとボールの支配権

a) オーバーライン (右図参照)

ボールを投げるとき、投げ終わったあともラインを踏んではいけません。相手内野ボールとなります。ボールを取るときラインを踏んではいけません。相手の内野または外野ボールとなります。相手の外野との境界線でのオーバーラインキャッチの場合には、相手外野ボールからの再開となります。



b) ダブルパス

内野同士・外野同士のパスはできません。相手の内野ボールとなります。インプレー中にボールを手渡しすることもWパスのファールになります。

外野がアタックしたボールを味方外野の選手がキャッチした場合は、パスとは見なされないためWパスのファールにはなりません。(2)の『アタックとパス』を参照

c) ファイブパス

パスは4回まで。5投目にはアタックしなければいけません。相手の内野ボールとなります。

パスとは相手を狙っていない投球のことです。(2)の『アタックとパス』を参照

アタックが外れて、味方の内外野に渡ったときは、パスカウントはゼロに戻ります。

主審がパスの回数を指で示しています。

作戦として、ファイブパスやWパスにならないよう、アタックの軌道を通るボールを投げ味方選手にキャッチさせることは有効です。

d) ホールディング

相手のコートに転がっているボールをかき寄せてはいけません。(空中はOK)

ボールのあったところ(相手の内野または外野)のボールとなります。

e) イリーガルキャッチ (イリーガルスロー)

ボールを故意に弾いて勢いを弱めたり、方向を変えた後に自分で取ったり、味方プレーヤーに取らせたりしてはいけません。つまり、故意に頭で受けたり (ヘディング)、弾いたり (トス)、蹴ったり (キック) してから捕球するプレーがイリーガルキャッチとなります。

また、足で蹴ったり、手で弾いたりしてパス、アタックをしてはいけません (イリーガルスロー)。相手の内野ボールとなります。

外野選手がワンタッチのためにボールを故意に手で弾くのはかまいませんが、その弾いたボールを味方選手が捕球した場合は、イリーガルスローとなります。

f) ダブルタッチ

アウトになった選手が、アウトコールを受けた後で、ボールに触ってはいけません。相手の内野ボールとなります。アウトコールを受けた時点でボールを持っている場合は、そのままボールをコートに置いてから外野へ移動します。

g) フライングスロー

プレーの再開時に、ボールアップせず主審の合図の前に投球してはいけません。相手の内野ボールとなります。

ふたば、あおばの部では、ボールアップを主審が注意して促します。主審の注意を聞かずボールアップをしなかった場合にファウルとして相手ボールとします。

h) キープ・フォー・ファイブ (=5秒ルール)

ボールを取ってから5秒以内に投げなければいけません。相手の内野ボールとなります。

ボールをキャッチしたときに転倒しているなど、すぐに投げられない状態の場合は、起き上がるなどして、投げられる状態になってから5秒となります。

i) ヘッドアタック

相手の頭や顔を攻撃してはいけません。相手の内野ボールとなります。

手や肩に触れた後に、頭・顔に当たった場合はヘッドアタックとはならず、アウトとなります。

また、髪の毛に当たった場合は、ヘッドアタックにならずアウトとなります。

j) ジャンパーアタック

ジャンプボールの後の内野からの第1投で、ジャンパーを攻撃してはいけません。当たったかどうかではなく、ジャンパーに対してアタックの軌道となる投球がファールとなります。相手の内野ボールとなります。

k) ジャンパーキャッチ

ジャンパーは、自分がタップしたボールを自ら捕球してはいけません。相手内野ボールとなります。

ただし、内野人数が一人で、ジャンパー以外の内野選手がいない場合はかまいません。

l) ダブルタップ

ジャンパーは、2度以上タップをしてはいけません。相手内野ボールとなります。ボールが偶然触れるのはかまいません。

m) フライングタップ

ジャンプボールではボールが頂点から落ち始めてからタップします。その前にタップをしてはいけま

せん。相手内野ボールになります。

n) タッチ・ザ・ボディ

わざと相手の選手にふれてはいけません。相手の内野または外野ボールとなります。故意に相手のプレーを妨害した場合は、注意（イエローカード）の対象となります。

o) インターフェアアー（妨害行為）

内外野の間を移動中の選手が、故意にボールに触れてはいけません。またジャンプボールの後の内野からの1投目をジャンパーが妨害してはいけません。相手の内野ボールとなります。

p) アウトプレー

ボールを持っていない選手が、故意に自コートから出た場合はファウルとなります。相手の内野ボールとなります。

ふたば、あおばの部では、審判がコートから外に出ている選手に注意を与えて、自コートに入るように促します。

アドバンテージ

ファールがあった場合、ファールをされたチームの有利になる場合は、審判はアドバンテージを見てそのファールを取らない場合があります。オーバーラインをして投球した場合であっても、相手チームがキャッチしていれば、ファールを取らないのが通常です。

(ト)抗議・アピールの禁止

試合中や試合後に、審判に対して、選手・監督・観客は抗議やアピールはできません。もし、そのような行為があった場合は、主審から警告、退場の処分を受けることがあります。また試合後であれば、大会本部が警告、退場の処分を行うことがあります。

ルールに基づいて審判員が公正な判断をしていないと思われるような場合は、試合終了後に、審判員ではなく、大会本部席に説明を求めてください。ただしその場合でも、判定が覆ることはありません。